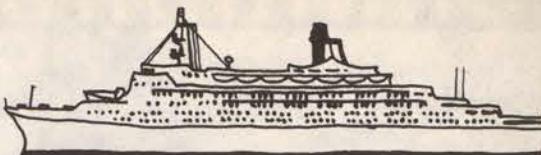


西暦1995年 港は豊かな生活空間をつくる…。

留萌港は世界の港につながる。



留萌港は、昭和11年に国際貿易港に指定され
てから50年がたち道北における留萌港のはたす
べき役割は、ますます重要になってきています。
留萌港開発の歴史は、明治20年にイギリス人
技術者C・S・マークの調査から始まり、数回
にわたる留萌港整備計画の実施が、現在の留萌
港の姿になっています。

そして、現在、留萌港は昭和70年（1995
年）の完成をめざし第7次港湾整備計画（昭和
61年度～昭和65年度）を進めていきます。
では、留萌港がどのように変わろうとしてい
るのか、ご紹介しますよう。

留萌港は、古くから石炭の積出し港として発展し、現在は原木の輸入、石油製品、重油、セメントの移入、石炭、米穀類の移出等を扱う流通港湾として道央、道北地域の発展に大きな役割を果すとともに、沖合・沿岸漁業の基地として重要な役割を果しています。

や港湾貨物量の増大や輸送形態の変化に対応できるための港として生まれ変わるために現在第7次港湾整備計画が進行しています。

この計画は、昭和70年完成を目指として、次のような施設等の充実をはかっています。

① 外国との貿易を中心とする
② 入港船舶の安全性と港内静港湾施設の整備。

北外防波堤

や港湾貨物量の増大や輸送形態の変化に対応できるための港として生まれ変わるため現在第7次港湾整備計画が進んでいます。

この計画は、昭和70年完成を目標として、次のような施設等の充実をはかっています。

① 外国との貿易を中心とする港湾施設の整備。

② 入港船舶の安全性と港内静穏度を確保するため、水域及び外郭施設の整備。

北外防波堤

(3) 小型船たまりの整備。
 (4) 港湾周辺の道路の整備。
 (5) 港湾地域の快適な環境を確
保するとともに、緑地等の整
備。

このような港湾施設の整備
が終わると左上の完成予想図
のようになります。

では、次に完成予想図にあ
る個々の施設について、現状
と将来構造について説明しま

港として貨物を荷降ろし 荷揚げをする所というイメージが 強くありました。

しかし、これから港湾整備は、近年増加しつつある海洋性レジャーの多様性や市民が水辺で親しめる施設に対する要求に対応して地域住民と港とのあり方を考えるうえで、緑地や公園の整備を進めて行きます。

（おうれいし）
吉田 しよう。

この縁地帯は、三泊地区の

シンボルとなり市民が憩いながら日本海に沈む夕陽を見る

北岸地区

ことができる場所になりまし
よう。

留萌本港内では、古丹浜ふ頭を埋立により造成していくが、まだまだ、野積み場・保管用地については、不足

や米穀類など外国からの貨物や金属類・化学工業品などの貨物の将来における増加を予想して整備を進める計画です。

している状態なので、今後増加が見込まれる港湾貨物に対応していくために用地を造成する計画があります。

都市再開発用地

南岸地区

地 工業地が混在している地区の解消と生活環境の改善及び地域産業の活性化を目標として都市再計画を行つていますが、三泊・塩見地区の都市再開発用地は、これ等の工場

(赤平・芦別・上砂川炭)が国鉄貨物貨車により運搬されていきましたが、国鉄貨物線の廃線等の事情により、この地区的の利用形態が変わろうとしています。

の移転のための受け皿として、
の計画があります。

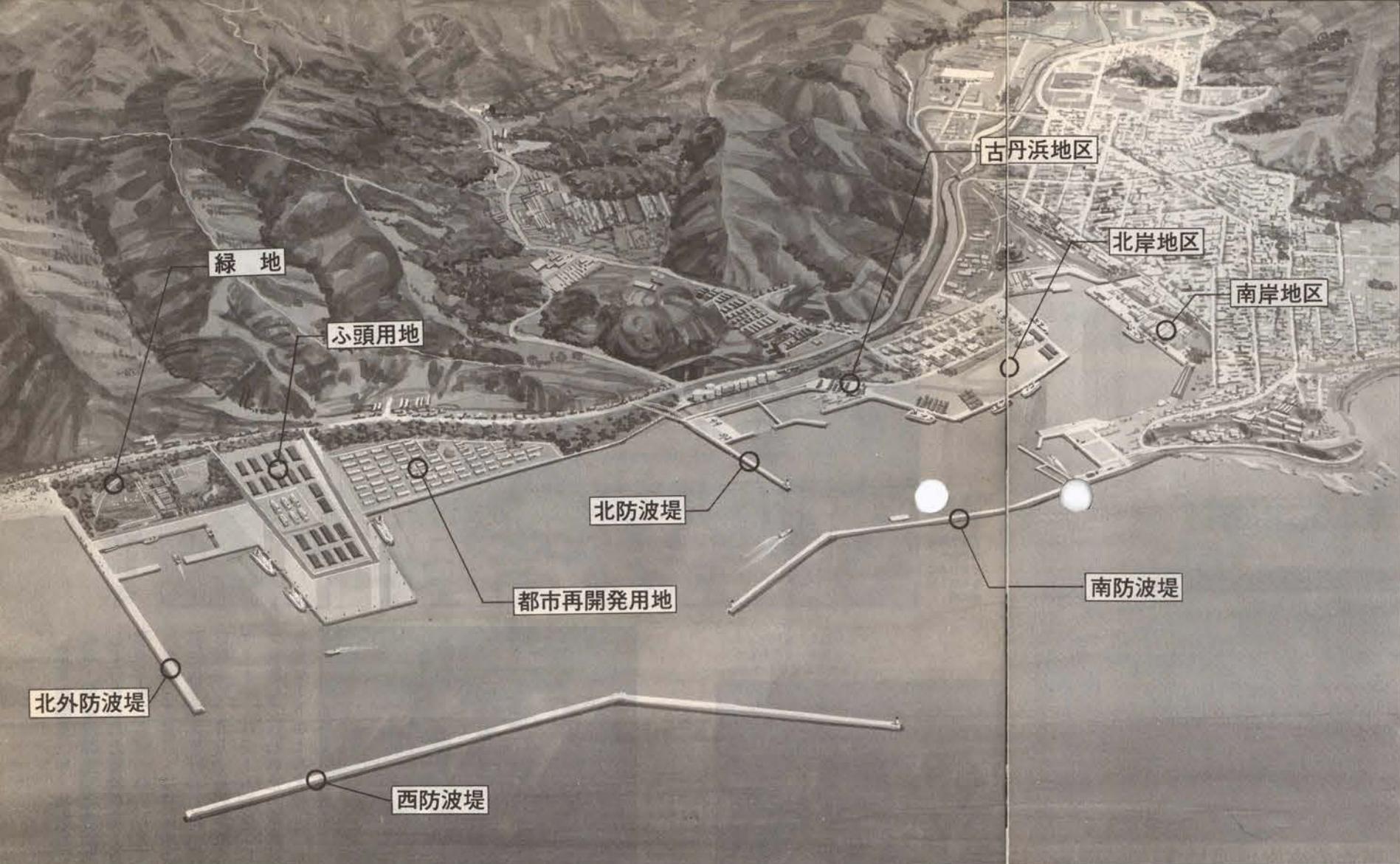
市では、国鉄高架の撤去等により、この地区的有効的な利用方法を検討していきたいと思っております。

古丹浜地区は、現在、南洋材（ラワン材）・北洋材（パルプ材）や海外炭の荷降ろし

と思つております

場・保管用地と利用されていますが、近年の輸入量の増加や国際貿易状況を考えますと今以上の利用度が高まり、この地区がはたすべき役割は、より大きなものになるでしょう。

もあり、私たちか、子供たち
に伝えていかなければならな
い夢ではないでしようか。
日本海の海は世界へつな
がり、留萌港も世界の港につ
ながる：国際貿易港るもい“



北外防波堤